

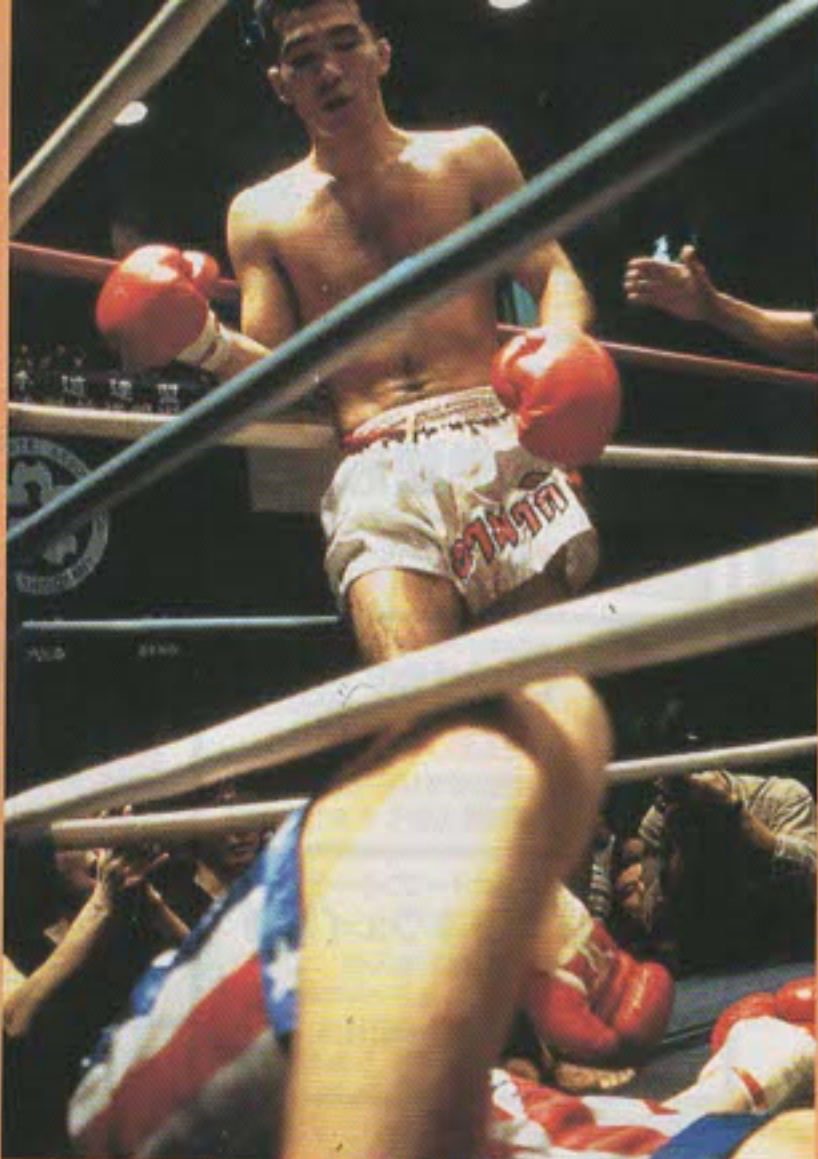
港太郎、世界王座を奪取!

ワールド・チャンピオン・カーニバルPART3

伊藤隆、復活のTKO勝利!

松下VS室戸、松尾VS渡辺は実現せず……

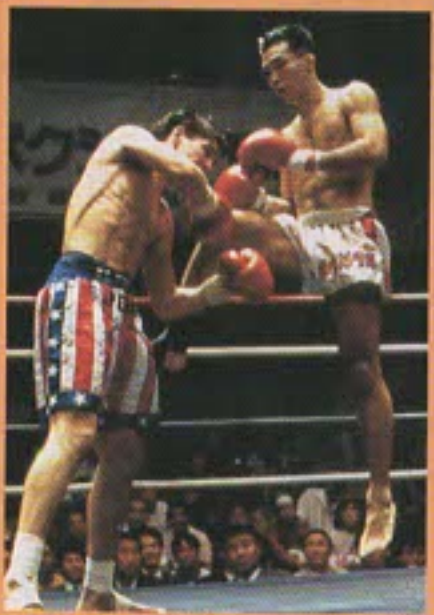
日時●1996年9月23日、午後5時／場所●後楽園ホール 主催●MA日本キックボクシング連盟



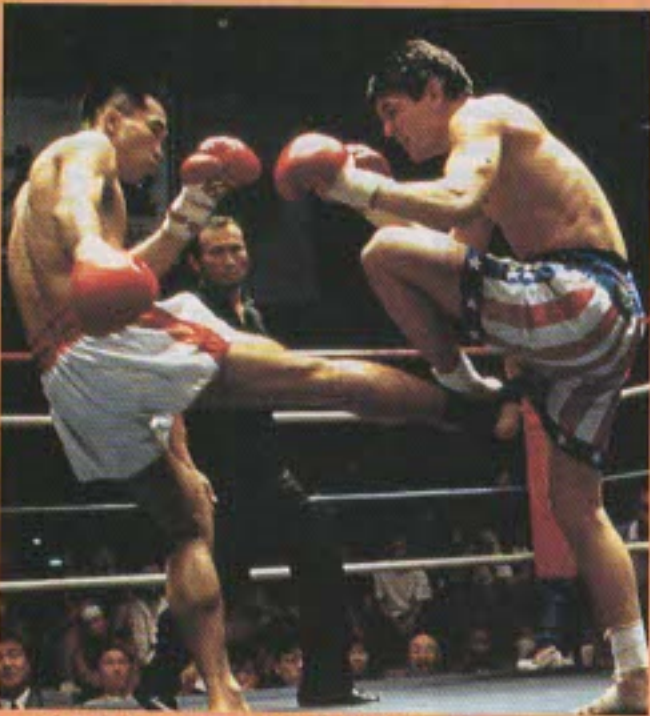
港の猛攻に、チャンピオンはたまらずダウン!



UKF世界王座のベルトをかけた港の心中やいかに……



飛び蹴りも出た!



ニックスのローキックに対するガードは、お世辞にも上手とは言えなかった。



伸びのあるストレートがニックスをとらえる。この日の港は絶好調だったが……

UKF世界ミドル級タイトルマッチ

日本キックボクシング連盟

●**港太郎** (山本)

〔4R1分10秒、KO〕

●**ケビン・ニックス** (USA)

UKF世界ミドル級チャンピオン

他団体でのKO負けを含めて連敗している港の再起を賭けた一戦に、MA側は世界タイトルマッチをぶつけてきた。

チャンピオンのケビン・ニックスはデル・クックの主催する何でもあり系の大会、エクストリーム・トーナメントで2回優勝経験がある他、ロニー・ルイスを破った強豪である。序盤、ニックスはすばやい左右のフック連打で港に襲いかかる。港はパンチに合わせてローキックを確実に決めるが、ニックスはカットするそぶりを見せないばかりか、サウスポーにチェンジし、再び左右のフックで突進する。

(もしや、ローキックの攻防を知らないのではないだろうか……)

そんな予感も2Rで早くも的中する。足を止められたニックスのジャブに、港はミドルを合わせ、右ハイを放つとニックスはガードごと大きくのけぞる。反撃らしい反撃はアメリカ選手特有のバックスピニングキックぐらいのものか。

こうなると、一方的な展開だ。

3Rには顔面への膝蹴りとパンチで2度のダウンを奪い、4Rには右ロー、膝、肘でめつた打ちにする。ニックスは鼻と頬から流血し、ドクター・ストップが宣告された。

修羅場をくぐってきた港にとって、UKFのベルトがどれほどの価値を持つものか、はなはだ疑問ではあるが、世界タイトルを奪取した以上、強豪相手に防衛を続けてベルトの価値を高めていってほしい。

日本ウェルター級次期挑戦者決定戦

日本ウェルター級1位

●**伊藤隆** (山本)

〔4R49秒、レフェリー・ストップ〕

●**井出本高次** (八世)

日本ウェルター級3位

伊藤もまた2度の敗戦により、どん底を味わっている。そんな伊藤が変わるきっかけは、気分転換のつもりで渡ったタイの、とあるジムに出かけたことだった。



タイで学んだことは「どんな体勢からでもヒザを出せ！」伊藤はそれを忠実に守った。



両者のスタイルはかみ合わず、一発打つてはクリンチする展開が続いた。



最後はコーナーでめった打ち。だが、井出本の根性を讃えたい。



神風のハイにチャンピオンは及び腰。プロ2戦目では、それもやむなし。



王者・山崎を相手に、井上は真つ向勝負を挑んだ。

マッコールの戦績(16戦16勝)のうち、15戦はアマ時代のものである。デビュー戦が世界タイトルマッチで、そのまま王者となったが、プロとしてのキャリアは一戦しかない。

● クリスティ・マッコール (USA)
UKF世界女子J・フェザー級チャンピオン
UKF世界女子J・フェザー級1位

○ 神風杏子 (白竜)
UKF世界女子J・フェザー級1位
「1R2分39秒、KO」
だが、全体に離れて一発打って、組んでブレイク...といった具合に単調な攻めが多く、噛み合わないままドロローとなってしまった。チャンピオン相手に気後れしないファイトを見せた井上の戦いぶりには好感が持てた。逆に山崎には王者として反省を促したい。

△ 山崎通明 (東金)
UKF世界女子J・フェザー級3位
山崎は世界タイトルを含めた二冠王なのだが、この日は国際戦は組まれず、契約ウエイトでの戦いとなった。井上は序盤から首相撲を仕かけ、回りながら膝を打ち込んでゆく。山崎も右フックをきっかけに飛び込んで首相撲の展開となるが、若い井上の方が優勢である。

△ 井上哲 (山木)
UKF世界女子J・フェザー級3位
だが、井出本も立派だった。流れる血をものともせず、打たれても打たれても前進し、3Rには肘打ち合戦を仕かけていったのだ。結局、顔にこたわりすぎた攻撃が仇となり、4R開始早々レフェリー・ストップが宣告されてしまったが、両者の気迫のこもった戦いに観客から大きな声援が飛んでいた。

「ムエタイやってる子どもたちが、試合に負けても次の日には明るく練習しているのを見て、「大人の俺がこんなことでは...」と、考えを改めたんです」
伊藤はその場で試合に出ることを決意し、タイ人相手に堂々の勝利を遂げ、みごと復活を遂げたのだ。
序盤、ローから細かいパンチを放つ井出本に対し、伊藤は首相撲から肘打ちを狙う。この打ち下ろしきみの肘が直撃し、井出本は早くも流血してしまふ。
だが、井出本も立派だった。流れる血をものともせず、打たれても打たれても前進し、3Rには肘打ち合戦を仕かけていったのだ。結局、顔にこたわりすぎた攻撃が仇となり、4R開始早々レフェリー・ストップが宣告されてしまったが、両者の気迫のこもった戦いに観客から大きな声援が飛んでいた。

○ 関貴彦 (山木)
「2R1分54秒、KO」

● 甲斐茂仁 (マイウェイ)
「2R1分54秒、KO」

○ 水田健一 (マイウェイ)
「判定、3-0」
● 田中みのる (東金)
○ 重光治郎 (みなみ)
「2R3分6秒、KO」
● 水島英彦 (白竜)
● 石井イチロー (東金)
「判定、3-0」

○ 伊達星輝 (新潟山木)
● 甲斐茂仁 (マイウェイ)
「2R1分54秒、KO」

○ MAユカリ (山木)
「不戦勝」
● 柴田早千子 (白竜)
△ 木村淳一 (マイウェイ)
「ドロロー、0-1」
△ ターミネーター 菊池 (玉生)
○ 荒井裕之 (山木)
「判定、3-0」
● 箱崎雄三 (活殺竜)
○ 大森政弘 (八街)
「判定、3-0」
● 風田陣 (新潟山木)

【その他の試合結果】
3回戦
また、国際戦を戦う相手選手のレベルが伴わず、メイン及びセミのポルテージを著しく下げているように思う。
観客の声援を集めるものは、選手の肩書きなどではなく、試合の内容そのものではないだろうか。ぜひとも再考願いたい。